

離島の思いは黒潮の流れとともに全国へ…、全世界へ
—「竹富町海洋フォーラム 2010」参加記—



2010年10月16日に竹富町西表島中野わいわいホールで開催された「竹富町海洋フォーラム 2010—離島が抱える海洋問題とその解決策—」に、北海道大学グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」の支援を受けて参加した。

本フォーラムは、竹富町主催による「海洋基本計画・シンポジウム 2010」と(社)日本海難防止協会による「[宝の島プロジェクト・シンポジウム 2010](#)」の共同開催という形で行われた。その目的は、2008年に施行された[海洋基本法](#)に基づき、竹富町が我が国初となる海洋基本計画を策定する機会を捉え、離島が抱える海洋問題（離島物流、観光戦略、海岸漂着ごみ問題）をテーマとした講演及びパネルディスカッションを行い、「海洋自治体竹富町」の将来を考えることにあった。

本フォーラムの内容に触れる前に、1点お詫び申し上げたい。というのも、筆者の都合に加え、本フォーラム当日に石垣港から会場近くの上原港に向かう高速船が欠航となり、到着時刻がさらに遅れてしまったからである。そのため、私の到着前に行われた山田吉彦氏（東海大学海洋学部教授）による「国境離島と海洋基本計画」、渡辺豊氏（東京海洋大学海洋工学部教授）による「海洋基本計画を踏まえた離島物流の自律とグローバル化」、伊波美智子氏（琉球大学産業科学部教授）による「観光と地域のサステナビリティ戦略」に関しては、本稿では省略させていただくことをお許しいただきたい。

大貫伸氏（日本海難防止協会主席研究員）による「宝の島プロジェクト—海岸漂着ごみ問題—」は、海岸漂着ごみ（廃発砲スチロール・廃プラ等）を油化装置によりスチレンを主成分とするエネルギーに変換することにより、離島を宝の島にするという主旨の報告であった。既に実験は竹富町鳩間島で行われており、移動式油化装置を開発することで、八重山地域はもちろん、対馬や佐渡にも広げることが計画されているという。

その直後に、大貫氏の講演で話題になった対馬市より参加された財部能成市長による挨拶があり、引き続き国境離島新法の制定に向けて努力しているとの発言があった。続いてエコロ・ジロー氏（お笑い環境士、環境カウンセラー、薬剤師）によるご自身のエコロジー活動の経験談及び腹話術（「みんなで考えようー竹富町の環境ー」）の後、石垣市の漢那政弘副市長による挨拶があり、石垣市も、竹富町に続き、海洋基本計画を策定することを検討している旨の発言がなされた。

パネルディスカッションでは、大貫氏をコーディネーターに、竹富町の川満栄長町長による海洋基本計画の策定に至った経緯及び策定後の展望に関する発言を受け、上妻毅氏（都市経済研究所理事）より 2004～2009 年の与那国町の自立支援の取組を踏まえた評価、吉田勝美氏（水圏科学コンサルタント事業本部長、竹富町海洋基本計画策定委員会事務局長）より今年（2010 年）度中の海洋基本計画策定に向けた今後の取組に関する発言がなされた。そして最後に、「竹富町海洋宣言」が川満町長により読み上げられる中、大盛況のうちに本フォーラムは幕を閉じた。

本フォーラムに参加して考えたのは、海洋基本計画と国境離島新法との関係である。地元紙ではそれらが混同されていたが、両者は現行法か否かで異なる。私見となるが、海洋基本計画は現行法に基づく枠組みであるため、いかに予算を計上できるかが課題となろう。一方、国境離島新法は、従来の法的枠組みでは予算化できない措置を求めるものと考えられる。したがって、順序として、各自治体が海洋基本計画を策定し、予算化可能なものとするものでないものを分類した上で、後者に関しては、新法で対応するように首長が国会議員に要請活動を行う方がより現実味が増すと考える。この点に関しては、別の機会があれば、改めて議論したい（関連記事は下記掲載）。

また、余談ではあるが、本フォーラム参加を通じて、離島交通のあり方を改めて考えさせられた。高速船の欠航により別ルートで会場に向かうことを余儀なくされたことそれ自体は、離島交通の“自立”の困難さを示すものであるが、同時に、“自律”の問題として、高速船と路線バスの接続の悪さ（大原港に着く数分前に路線バスが港近くのバス停を出発）に直面したからである。結局は、代替バスのある船会社を利用することで、何とか会場に行くことができた（それでもさらに数十分以上遅れることになった）が、奇しくも昨年対馬空港でも同じ経験（荷物を受け取る間に、客を乗せずにバスが空港近くの停留所を出発）をしたことを思い出した。本フォーラムでも、川満町長や財部市長が「離島にとって、“自立（そのための国の支援も含む）”だけでなく、“自律”も必要である」と発言されたが、上記事例によりその重要性を改めて痛感した。

最後に改めて「竹富町海洋宣言」に話を戻すと、宣言では「離島の思いは黒潮の流れとともに全国へ…、全世界へ」という文言で締めくくられている（全文は下記掲載）。これからの情報発信次第では、全国そして全世界へ広がる可能性は十分に期待できる。本参加記もその一助となれば幸いである。

古川浩司（中京大学）



(参考資料)

竹富町海洋宣言

真の海洋国家・日本を形成するためには、国主導の政策実行のみならず、離島として独自の取り組みが不可欠である。

すなわち、全国の離島が各々の直面した様々な課題の克服に向け、未来志向の施策を自ら打ち出し、実現に向けて取り組めるか否か、これが重要な鍵となる。

私たち「日本最南端の大自然と文化の町」竹富町は今後、近未来型の“海洋自治体”としてふさわしいリーダーシップを発揮し、近隣自治体とも相互連携を図りながら、島々の暮らしを守り、ますます発展させるとともに、真の海洋国家・日本を形成するため必要な取り組みを導き出し、実現に向け、果敢に挑戦していくことをここに高らかに宣言する。

離島の思いは黒潮の流れとともに全国へ・・・、全世界へ

平成 22 年 10 月 16 日

竹富町長 川満栄長

(出所)『八重山毎日新聞』2010年10月17日

(関連記事)

- ・「国境離島新法を」竹富町海洋フォーラム 川満町長が海洋宣言
(『八重山毎日新聞』2010年10月17日：<http://www.y-mainichi.co.jp/news/16982/>)
- ・竹富町海洋基本計画要望項目を集約整理へ 委員から活発な意見相次ぐ
(『八重山毎日新聞』2010年10月16日：<http://www.y-mainichi.co.jp/news/16978/>)